



福澤利喜三郎 [1871~1955]

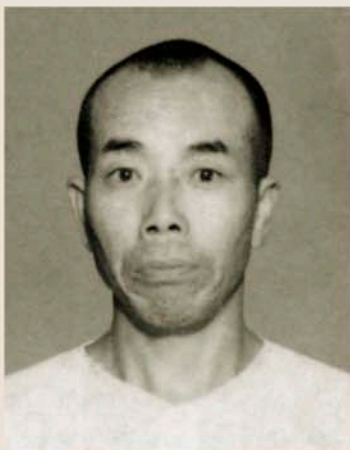
市田柿の苗づくりや接ぎ木技術の発展に貢献し、
飯田、豊丘から伊那、岡谷まで苗木を広めた

福澤利喜三郎・
伝蔵 親子

●ふくざわ りきさぶろう・でんざう

福澤利喜三郎さんは明治四年（一八七二）生まれ。父・音松さんが始めていた苗木屋を手伝いながら、柿の苗木作りや接ぎ木の技術を覚えたそうです。柿の接ぎ木栽培は江戸時代からすでに行われていましたが、市田村から各地へ焼柿の苗木が広まったのは、明治以降の接ぎ木技術の進歩によるところが大きいといわれています。

趣味で浄瑠璃を演じるなど手先が器用だった利喜三郎さんは、さらに「飯田からの帰



福澤伝蔵 [1896~1979]

り道、赤ちょうちんが見えると端から寄ってきた」という逸話が残るほどのお酒好きの面もあったとか。

しかし、仕事の腕前も評判で、大八車に赤土と竹の皮を積んで、あちこち接いでまわったそうです。当時は高い位置で接ぐことが多く、接いだ部分に練った赤土を塗って、乾かないように竹の皮でくるんだといえます。

息子の伝蔵さんは、生前に「市田柿とともに生きてきた」と自らのことを話したように、市田柿の発展に大きく貢献した二人です。昭和初期から戦後にかけて、養蚕から果樹への転換が叫ばれた時期には、注文に応



玄関脇に掲げられていた看板

下市田で果樹栽培の基礎を築き、
市田柿への改称や中央市場へのPRに尽力した

橋都正農夫

●はしづめ まさのぶ

橋都正農夫さんは、下市田地区で本格的に果樹栽培を始めた先駆者として知られています。札幌農学校（現在の北海道大学農学部）在学中に、リンゴの苗木を父・多賀司さんの元へ送ったのが、伊那谷での最初のリンゴ栽培となりました。北海道、青森県、和歌山県などの農業試験場長をはじめ、台湾精糖に勤めたり、スマトラでのゴム栽培でも活躍し、東京を起点に海外へも頻繁に足を伸ばしていたそうです。そして、大正十一年（一九二二）、多賀司さんの死をきっかけに市田村の実家を継ぐことになりました。



橋都正農夫 [1880~1943]

下市田区壮年団長を務め、
市田柿の栽培に積極的に働きかけた

酒井安

●さかい やす

酒井安さんは、明治二十一年（一八八八）に吉田村の宮島家で生まれました。飯田中学校（現在の飯田高校）を卒業後、教員免許を取得し、下市田小学校や飯田尋常高等小学校などで教鞭をとっています。酒井ひささんと結婚し、酒井家の養子となって下市田に移ったのは、明治四十二年（一九〇九）

った金色の柿の種を拾い、その種をまいたところ、大粒で色沢がよく美味しい実がなって近所で評判となり広まった」という市田柿の沿革です。これは正農夫さんの弟で民俗学者の岩崎清美さんが創作したものです。チラシに印刷され、化粧箱に1枚ずつ入れて出荷されたといえます。

また、下市田区長として県立農事試験場下伊那分場の誘致に尽力し、下伊那郡農会長や伊那園芸協会会長を務めた上、自身もリンゴや二十世紀梨の栽培をいち早く始めるなど、果樹全般で多くの業績を残しています。

このことです。下市田区壮年団長、市田村壮年団長を務めました。

市田柿の改称や出荷の際には、上沼正雄さん、橋都正農夫さんらとともに代表となっていて関わっています。ちょうど三十代半ばだった安さんは、若手のリーダー格として壮年団員のまとめ役を担い、市田柿栽培の普及・拡大の先頭に立っていたのではないかと考えられています。